

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

☆ 『福祉のひろば』アンケートにご協力ください! ☆

『福祉のひろば』は、2025年で月刊化25周年をむかえます。この機会に、総合社会福祉研究所会員および『福祉のひろば』読者のみなさんを対象に、本誌をどのように活用されているかをお聞きし、今後の発展に活かしたく、アンケートにとりくみます。下記QRコードよりご回答をお願いします。

『福祉のひろば』のいいと思うところ、改善してほしいと思うところ、また、情報発信や会員・読者の交流のあり方について、ぜひみなさんのアイデアをお寄せください☆ご協力をよろしく申し上げます!

総合社会福祉研究所／月刊誌『福祉のひろば』

TEL06-6779-4894 FAX06-6779-4895

<http://www.sosyaken.jp/>

E-mail: mail@sosyaken.jp

※その他、メール等でもぜひご意見をお寄せください。

個人会員・
読者はこちらから↓



団体会員は
こちらから↓



きこえない人の ひとりぼっちをなくす

はつじゅん
の杜

聴覚障害者複合施設「神戸長田ふくろうの杜^{もり}」（社会福祉法人ひょうご聴覚障害者福祉事業協会）は、就労継続支援B型事業と神戸市の生きがい対応型デイサービス（介護保険対象外）をおこなっていた「神戸ろうあハウス」の移転拡充を目的とした新施設建設への1億円募金運動を経て、2020年12月にスタートしました。4階建ての建物では現在、就労継続支援B型事業（1階のカフェと下請け作業等）、生活介護事業、デイサービス（地域密着型通所介護）、生きがい対応型デイサービス（地域拠点型一般介護予防）、放課後等デイサービス、相談支援事業の6つの事業をおこなっています。

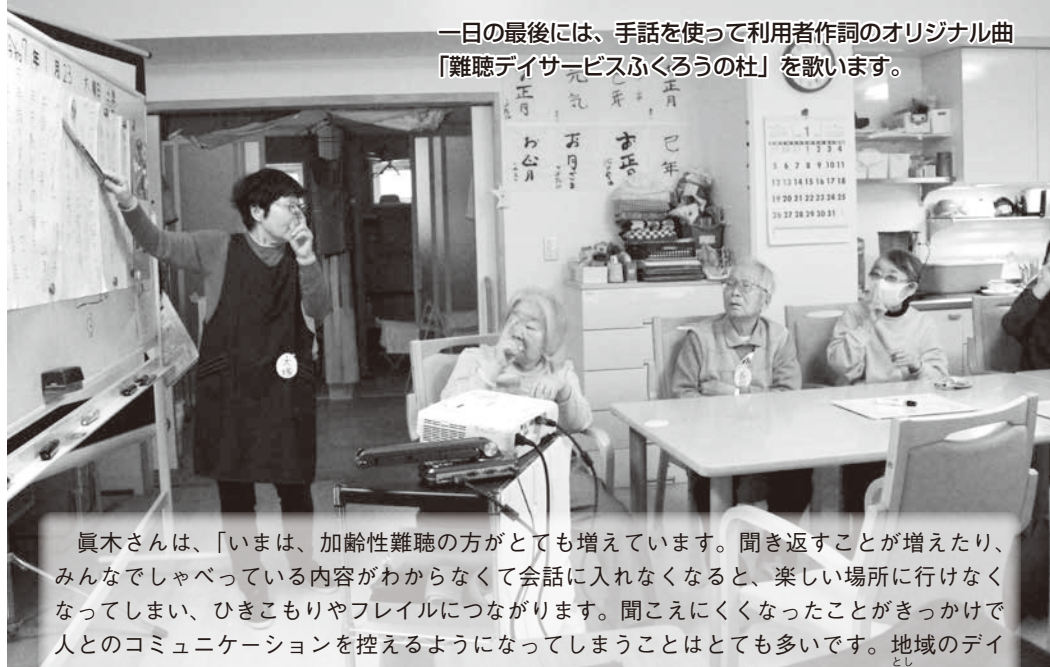


毎週木曜日には、高齢難聴者を対象とした生きがい対応型デイサービスを実施しています。難聴デイをおこなっているのは神戸市内でここだけなので、週1回のこの日を楽しみに、かなり遠くから通って来る方もおられます。「生まれつき聞こえないろうの方と難聴の方では、手話やコミュニケーションの方法にちがいもあり、難聴の方へのコミュニケーション支援はとても大切」と施設長の眞木崇江^{まき たかえ}さん(写真)。加齢性難聴の方もたくさんおられ、ふくろうの杜では、手話の練習もしながら、筆談などさまざまなコミュニケーションの方法を工夫しています。その一つが、写真にあるような、自動文字起こし機能を使って会話を文字に起こし、それを書画カメラを使ってプロジェクターに映すというものです。



卓球バレーボールを楽しむ利用者さん。

一日の最後には、手話を使って利用者作詞のオリジナル曲「難聴デイサービスふくろうの杜」を歌います。



眞木さんは、「いまは、加齢性難聴の方がとても増えています。聞き返すことが増えたり、みんなでしゃべっている内容がわからなくて会話に入れなくなると、楽しい場所に行けなくなってしまい、ひきこもりやフレイルにつながります。聞こえにくくなったことがきっかけで人とのコミュニケーションを控えるようになってしまうことはとても多いです。地域のデイサービスなどにも聞こえにくい利用者さんはたくさんいると思います。それを、“歳いって聞こえにくくなっているから仕方がない”と放置せず、一人ひとりに合ったコミュニケーション支援の方法を模索してほしいし、こうした機械も活用できますよ！ ということをぜひたくさんの人に伝えたいです」と話してくださいました。



14時半を過ぎると、少しずつ放課後等デイサービス「ふくろうっこ」（小学1年生～高校3年生）に子どもたちがやってきます。聞こえない子、聞こえにくい子、聞こえるけど言葉が出ない子など、一人ひとりのコミュニケーションの困難に寄り添いながら、お互いに認め合い安心できる居場所づくりをめざし、遠い子では送迎の車で1時間弱かけて通う子もいます。管理者の山本芙由美ふゆみさんはろうの当事者です。「子どもにとって、聞こえない大人と関われる場所ということで、悩んだり困ったりしたときに相談してくれることもあり、とても大切なことだと思うし、楽しい居場所にしたい」と話してくださいました。

（写真・文 申佳弥）

※トピックスP.46でも紹介しています。

●特集● 福祉現場で起きる虐待の実態とその要因
——打開の方向を考える——

〈座談会〉足立早苗／高橋孝雄／二見清一／松下かほる／松尾悦行
／児嶋芳郎 10

●トピックス●

第29回合宿研究会のご案内 32

コロナ禍をへて問われる保護者会・家族会のありよう
中島 素美 34

第26回全国シェルターシンポジウム2024 in KOBEからの報告Ⅱ
——離婚後「共同親権」法改正がもたらす懸念と課題
朴 仁淑 38

〈投稿〉重度視覚障害をもつ私が家を借りるということ
坂本 堅一 44

もっとグラビア きこえない人のひとりぼっちゼロをめざして
申 佳弥 46

第37回社会科学・社会福祉基礎講座、修了しました！ 48

●連載●

なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場
住みなれた地域に入所施設を 田槇美智代 52

続・ヘルパー歳時記 生活を支えるとはどういうことか② 56

WORK WORK——わくワク——
「ニューヨークマンハッタン摩天楼」ポーチって!?! 工房和丘 60

JOB & ACTION 全国福祉保育労働組合 (48) 62
人権と尊厳を守る仕事をめざして

私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (48)
在所のような保育園に 新美 亘 64

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (68) 水野阿修羅 66

育つ風景 30年まえの卒園児Mくんのこと 清水 玲子 68

映画案内 『夜明けのすべて』 吉村 英夫 70

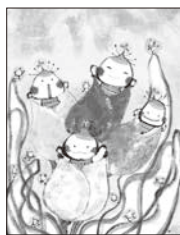
現代の貧困を訪ねて 生田 武志 72
大阪地裁による「あいりん総合センター」での野宿者の強制排除 (2)

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんががアート
またまたメジャーなのじゃ ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



僕のつまらなさについて

大阪大学大学院 人間科学研究科 村上靖彦

中学生の頃に小説を熱心に読み始めたときからずっと僕につきまとい続けている思いがあります。僕自身が「つまらない」人間であり厚みのなさゆえに、僕は例えば大江健三郎のような小説を書くことができないのではないか。才能のなさだけでなく、何かが欠けていると感じてきました。その頃は、四国の山奥の大江のような故郷を、殺風景な東京郊外出身の僕は持たないからだろうかと考えていました。

医療福祉現場で調査をするようになった二〇〇三年以降は、病や障害の当事者としての困難、あるいは支援者としての経験が欠けていることが、とるにたらない「つまらない人間」である僕の根っこにある欠落のように感じています。これは他の人が被った痛みへの想像力を僕が欠いているということでしょう。

ハン・ガンをはじめとする韓国文学を翻訳してきた斎藤真理子を引用してみます。

なぜ韓国では詩がよく読まれるか。

それはもう、「痛みを知る人が多かったから」と言っつてよい。

〔…〕近代以降、朝鮮半島の歴史は激痛の連続だった。

詩人はいつも、痛みを表現し、代弁する人だ。そのことで尊敬もされたし、そのために受難者になることもあった。

植民地時代の詩人たちの中には民族独立運動家が少なくなく、監獄で死んだ詩人もいた。一九四〇年代に入ると日本語での創作が強制され、著名な詩人たちは筆を折ってしまった。

一九四五年に日本による植民地支配は終わるが、解放されたと思ったら朝鮮半島は南北に分断されてしまい、過酷な朝鮮戦争を経験し、その後は軍事独裁政権の支配下で自



むらかみ やすひこ

1970年東京生まれ、大阪大学人間科学研究科教授・感染症総合教育研究拠点CiDER兼任教員、著書に『子どもたちがつくる町 大阪・西成の子育て支援』（世界思想社、2021）『ケアとは何か 看護・福祉で大事なこと』（中公新書、2021）、『客観性の落とし穴』（ちくまプリマー新書、2023）他

由と人権が守られない状態が続いた。

〈斎藤真理子（二〇二四）『隣の国の人々と出会う 韓国語と日本語のあいだ』創元社、100頁〉

被暴力の歴史があり、そのなかでの民主化の運動が文学の創造の核にあるというのです。しかしどれだけの日本人が戦後の朝鮮半島の困難を自分ごととして感じ取ってきたでしょうか。少なくとも僕自身は「痛みを知る人」ではありません。

戦後の日本は国際情勢のなかで、朝鮮戦争の銃後のロジスティックを担うことで、高度経済成長を果たすとともに、韓国のような暴力的な経験を「まぬがれ」しました。「まぬがれた」のは地政学的な偶然のなかで、朝鮮半島に困難を押し付け、戦争の利益を日本がかすめ取ったからです。

僕自身、戦争に由来する何世代かにわたるさまざまな家族の困難と暴力から一人だけ「まぬがれてきた」。僕の「つまらなさ」の背景には、家族が当事者として引き受けてきた傷と傷に対する僕の鈍感さがあります。「痛みを知る人」でないだけでなく、その背景には僕と困難の当事者のあいだに横たわる歴史と社会の差異があります。

その意味で、僕自身の「つまらなさ」と日本の「つまらなさ」は相同的です。自分自身が加害側になることで、隣人が受けた暴力から「まぬがれ」「知らずに」すみしました。自分にも何らかの責任がありうる傷、周囲が傷つけられるなかで偶然傷を被らない位置に身を置くことになっただけです。つまり、僕個人の足元に見えてくることは、実は二つの社会のあいだに横たわる不均衡をどのように把握するのか、特権を持った側には不均衡がなぜ見えにくいのか、という大きな問いにつながります。

福祉現場における 虐待問題に向き合うことについて

二〇一六年七月二十六日、神奈川県立知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」の元職員が施設の入所者一九人を殺害し、入所者・職員計二六人に重軽傷を負わせるといふきわめて悲惨な事件が発生しました。二〇二〇年三月に死刑判決が確定している植松聖死刑囚は、「社会の役に立たない障害者はいなくなればいい」などと動機について語っており、犯行の根底にある優生思想が全国的な議論を巻き起こしました。実際にSNS等では植松死刑囚の犯行に共感・賛同するようなコメントもあるなか、社会福祉関係者をはじめ、さまざまな団体や個人が植松死刑囚の犯行を許さず、社会にはびこる優生思想を乗り越えようととりくんできました。

しかし、史上最悪の虐待事件といわれる「津久井やまゆり園事件」のあとも、高齢、障害、保育の現場における虐待のニュースはあとをたちません。今号の特集では、あらためて、福祉現場における「虐待」とはどのような状況を指すのか、その状況はどのような要因で発生するのか、そして、その状況を打開するためにいま現場からなにができるのか、考えたいと思います。

座談会には、事件が発生した津久井やまゆり園をふくむ県立施設のこれからについて考え、要望などの

活動をつづける「これからの県立施設を考える会」の松尾悦行さんにもご協力いただき、事件のその後をお話いただきながら、福祉現場における虐待の問題についてともに考えていただきました。

たしかなことは、「虐待」はなんの前ぶれもなく急に発生するものではないということです。虐待につながりかねない「芽」がかならずあるはずです。その「芽」に敏感に気づき、一つひとつつていねいに摘み取っていくことが不可欠です。座談会のなかでは、虐待の「芽」に敏感に気づける組織であるためになにが大切かということをし、それぞれの立場から指摘いただき考え合うことができたと思います。

子どものころから競争が強いられ、自己責任論が強化され、経済的な生産性の高さが評価されるいまの社会のなかで、私たち一人ひとりのなかにある内なる優生思想は無意識のうちに強化されつづけています。いっぽうで、そうした価値観に疑問をもち、だれも見捨てず、一人ひとりの人権と尊厳を守る役割をになう福祉のしごとの魅力とやりがいを感じている福祉労働者もたくさんいます。福祉のしごとは、目の前にいる利用者さんの存在や福祉実践から、自分の実感として優生思想に「ノー」を突きつけられる可能性を秘めており、社会にひろがる生産性第一の価値観に疑問を投げかけていく役割も担っています。

社会福祉における制度改善が、福祉現場の困難を生み出していることはまちがいありませんが、その困難を「仕方がない」とあきらめず一つひとつ向き合っていくことが、虐待を防ぐだけでなく、福祉の仕事のあるべき姿や大切な価値観を取り戻し、優生思想に立ち向かう大きな力になるのだと思います。

(編集主任・申 佳弥)